

むかし「局アナ」いま「隠居」
地震恐ろしや



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中



「地震が好きだとか、地震に揺られると快感を覚える」
 こんな胆力の座った人は減多にいないと思えますが、あまり怖がらない人とか、少々揺れても気が付かない鈍感なお人にはときどきお目にかかります。

身近な例として、ウチの伴が鈍感でした。

30歳の会社員だった彼はあのおぞましき「阪神淡路大震災」の当日、活断層の真上にあると言つてもいい池田市石橋のマンションの二階で寝ていたのに、全く地震に気づかず、グーグー眠つていたのだそうですが、そんな伴と遺伝子を共有している筈の私は、地震が怖くて仕方がないのです。

あの朝、私は大阪の自宅(木造)の二階で寝ていて、「ああこれで終わりだ」と観念しました。

特に旅先はいけません。「自分はこの地で死ぬのか」なんて「震度4」ぐらいで、固まってしまうのです。

*
新潟地震の日、松本市の小料理屋の二階で揺られた

ときも死ぬと思いましたが、東京出張中、京浜東北線の運休を招く地震に出遭ったときも東京での客死を覚悟しました。

男のくせに恥ずかしいし、情けないと思うのですが、そんな私も、小学生の頃は平気だったのです。

ずっと東京で暮らしていたので地震は慣れっこになっていました。

その後、長野に疎開して居候した先が線路に近く、列車が通るたびに家がグラグラ揺れていましたので、少々の揺れは平気だったのです。

ところが、敗戦の翌年、一九四六年12月21日の払暁、徳島市栄町二丁目の実家で南海大震災に遭遇した私は地震の恐怖を嫌というほど味わいました。

中学校一年生だった私が機嫌良く眠っていたところ物凄い音と揺れに襲われ、身を起し「こそうにもなかなか立ち上がれないのです。

何しろ敗戦直後の安普請(やすぶしん)でしたから、揺れるの何の、「ギイコギイコギイコ」

家の軋む音もおぞましく、「こんなボロ家に居たら命がないぞ」

そう思った私は、縁側の戸を開けて外へ出ようとしたのですが、ヨロヨロして何かに掴まらなさと立っていられません。

そのとき背後から父の声。「博章。外へ出るなッ」

体験したことのない天変地異に直面すると、古老の言葉には重みがあります。



外に出るのを諦めた私は、廊下と座敷の間にある柱にしがみ付いていました。

後日 父に尋ねたのです。「なぜ、外へ出たらアカンなんて言うたの?」

父はバツの悪そうな顔でこう言いました。「慌てて表に出た人の頭に

瓦が当たって死んだという話を聞いたもんでな」

長年、ニュースの現場に携わりましたが、そんな話、聞いたことがありません。

父は寝とぼけていたのでしよう。

*
揺れが収まり寒さに震えながら寢床に戻ったところ、

何と、私が寝ていた蒲団の上に箆筒が倒れています。枕の上ではなく、お腹のあたりだったので、そこで寝ていたとしても痛い目に遭っただけで命に別状はなかつたでしょう。

停電の中で、茫然としていると、隣の窓から蝋燭の灯りが洩れて来ました。隣は靴職人の親子が住む気安い家で、お兄ちゃんは草野球の仲間です。

「えらい地震じゃな」
 声をかけながら入って行くと、大きな唐草模様の風呂敷に鞆(なま)し皮をどつさり包んでいました。

「兄ちゃん。何しよんで?」
 「津波が来るかもしれへん。博章ちゃんも山へ逃げんと危ないですよ」

「兄ちゃん。何しよんで?」
 「津波が来るかもしれへん。博章ちゃんも山へ逃げんと危ないですよ」

震災と敗戦で素ッ寒貧になった我家に貴重品なんかありませんから、厚着して近くの眉山まで逃げられる準備だけしていると、

「カランコロン」

…寒空に下駄の音を響かせ、眉山へ向かう人たちが通り過ぎて行きます。

毛布を被り、蠟燭片手に、「カランコロン」

遠くで海鳴りが聞こえて…怖かったですねえ。

*

津波は来ませんでした。大きな荷物を纏めた隣のお兄ちゃんや毛布を被って山に向かった人達の行動は空振りに終わったのです。

もしかすると周囲の人に、「臆病者」と陰口を叩かれたかも知れません。

正直言って 私も、そんな気持ちでした。

しかし 今は、この行動が正しかったと思うのです。

なぜならば、敗戦直後の放送局はNHKのラジオがあるだけで、そのラジオも、地震のあった午前四時には放送していませんでしたし、放送していても、あるとき

地震の被災地は殆んど停電していました。

携帯ラジオもない時代で、徳島市内に津波が来るのか来ないのか、誰にも判らなかつたのです。

徳島市は海沿いの河口に立地していますから、もしあるとき東北並みの津波が来ていたら、私達はとても逃げられなかつたでしょう。

現にこの時、60キロ南の海部郡 浅川村では、地震の20～30分後に襲った津波で85人の村民が命を奪われ、壊滅的被害を蒙つたのです。



『武士の家計簿』を書いた歴史学者、磯田道史さんはテレビでもお馴染みですが、彼の母上は、二歳のときに、この徳島の浅川村で、南海地震の津波に遭い、九死に一生を得たお人でした。磯田さんが地震や津波の歴史に詳しいはずですよ。

磯田さんは津波についてこう言っていました。

「あの東北大震災の津波で甚大な被害を受けた地域の高台に立つ 小さな石碑に、「此処まで津波が来たのだ」というメッセージが刻ま

れていたのに、その貴重な教訓が生かされなかつた。津波で大切な人を失つた

ご先祖様が、子孫のために託した遺言だったのに…」

こう述べて 磯田さんは残念がつているのです。

*

TBSのテレビドラマのテーマ音楽「恋」が選抜高校野球の入場行進曲に選ばれましたが、その番組名が、「逃げるは恥だが役に立つ」という長い名前でした。

逃げるのが「恥」かどうか、…そりゃ確かに逃げにくい場合はあるでしょう。

逃げ支度をしているとき、「意気地なし」「根性ないな」

なんて言われると、逃げそびれてしまいそうです。

しかし磯田さんの母上が浅川村で遭遇した大津波は揺れてから 20～30分後に襲つてきました。

津波が来そうだったら、「われ先に逃げるに如かず」エエカッコして、見栄を張つて 死んでしまつたら、

何もかもお終いです。「命あつての物種」

「死んで花実が咲くものか」

こんな 農民的 処世術があるではありませんか。

「逃げるが勝ち」です。

*

近頃は地震の被害の中に、「原発メルトダウン」という被害が加わりました。

東電は「事故」を「事象」と表現して大事故を矮小化し、やがて 周辺が汚染されて手に負えなくなつてから、

「実はメルトダウンでした」と白状しています。

原発の権威で東大教授の諸葛宗男氏は汚染水対策をテレビで提案していました。

「石油タンカーを動員して汲み取ればいい」

ところが、満杯になつたタンカーの汚染水を、どう

するのかは言いません。また彼は、放射能 洩れが、

やや小康状態になつたとき、「あー、やっと出血が止まりましたねえ」

と笑いながら言いました。彼の心と体は原発であり、

彼にとって汚染水の流出は「我が身の出血」なのです。

つまりその血が、農地や海や街を汚染する猛毒だという自覚が全くない。

この手の人たちが原発を押し進めてきたのです。

汚染水だけでありません。放射能まみれの固形物は

黒いビニール袋に詰められ、農地に野積みされています。

カッターナイフの一本で、テロ攻撃が出来る状況を、

東電や政府はいつまで放置しておくのでしょうか。

一方、頻繁にミサイルの発射実験をする国の鼻先に

原発をズラリと並べてどうするのでしょうか。

核弾頭抜きミサイルで、核攻撃と同じ被害を受けるかもしれないのです。

軍備を整え法律を変えて、戦争が出来る国を作る前に、

テロリストや、近隣諸国に憎まれたい国にして欲しい

ですね。

先ずは、行政を代表する首相や、閣僚の靖国参拝を控えて頂くとか…